

## 二〇枚かさね桂感想

—おしゃれは我慢から—

落 里美

『源氏物語』を執筆した紫式部の時代の歴史を記した『栄花物語』によれば、女房達のかさね桂は二〇数枚にも及んだと記されている。かさね桂は五枚と定められた現代の十二単でも、一式を纏えば一六kgに及ぶ重さである。平安時代は蚕の糸が細かったといえども二〇枚をかさねたらどのような重量や着装になるのかという検証のために、二一枚のかさね桂を製作した。

まず、形状について、絵巻物などからみた平安時代のかさね桂は袖口などを見ると、樹木の年輪のような重なりが見て取れ、現代の五衣のようにサイズを少しづつ変えて仕立てた形式美とは違って、同寸の形状の仕立てであろうと判断した。寸法については熊野速玉大社所蔵の国宝「雲立涌文固綾」の裃の寸法で仕立てた。この裃は現存は一枚であるが、記録によるととは五枚のかさね桂で、室町時代のものであり、平安時代のかさね桂の具現化に一番近い現存資料であった。

熊野速玉大社の裃の形状は、現代のかさね桂と異なり（おめり）がなく、（身八口）のない直垂衾のような衿仕立ての

形状である。現代のかさね桂はサイズを細かく変えて仕立てることによって、着装した際に実に細かい〈ずれ〉が生じてかさね色目の美しさが表現されるようになっていくが、それがゆえに自由に色あわせを変えて着用することはできない。これに対し、平安時代のかさね桂は、同寸の仕立てであれば四季折々の美を取り入れたかさね色目を自由に組み合わせることができ、枚数も好き好きにかさねることができたために、美の競演の極致が二〇数枚にも及ぶことになったのであろう。

実際に二〇枚のかさね桂を着てかさねがどのように見えるのか、羽織ってみると実に美しく表現されていた。〈振り〉がなく、筒袖形状の中で収納されている二〇枚の袖は、同寸で仕立ててあるがゆえに微妙な歪みが生じ、それが年輪のように美しく表現される。同寸の裾も生地の厚みで生じたわずかなずれが美しく、色目のグラデーションが生じる。着装で困ったことは広衿の始末で、現代の十二単のように〈襟肩あき〉を肩にのせて着用すると、自然にできた〈僧網襟〉のようになり、法皇の〈褒代姿〉のような衿になる。これは女性の雅の感性と程遠く、みやびやかに装うには広衿を衿のように扱った着方で解決された。

広衿を現代の装束の衿のように畳んで着用することも考えられたが、二〇枚の衿を畳んで折ると四〇枚分の衿、またはそれ以上の厚みになるので、現実的な着方とは思えない。広衿のまま、衿の役目であるように着用するにあたって一番必要であったのが脇の筋力で、二〇枚の厚みを脇でとめて肩ぬぎしたように着用すると、腕の筋力が強化されるような感覚であった。「懐手」が絵巻や物語に不作法だと記されている意味も、着用したことで理解できた。重さは、裾が引きずる部分の生地は床で支えてあるので重みからくる辛さはなく、起居進退が問題なく行える。一二〇〇年前の女性と今を生きる女性の共通点は「おしやれば我慢から」ということであらうか。具現から学んだ貴重な機会であった。



僧網襟のよう…



あごめ こうくもたてわくもんかたあや  
相 香雲立涌文固綾 室町時代(国宝)、熊野速玉大社所蔵

(風俗博物館事務局学芸員・  
株式会社井筒企画 Chief Costume Designer)



20 枚を広衿のまま着装すると…